

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01737

研究課題名(和文) ブラインドサッカーのコーチングシステム構築に向けた言語教示内容の分析

研究課題名(英文) Analysis of language teaching content for building a blind football coaching system

研究代表者

橋口 泰一 (HASHIGUCHI, Yasukazu)

日本大学・松戸歯学部・准教授

研究者番号：90434068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ブラインドサッカーのプレーに遂行に関わる言語指示からみたコーチングシステム構築に向けた基盤的研究として、量的・質的アプローチによる調査を実施した。第1に、コーチ、ガイドに対する言語教示内容や指導方法についての分析、プレー中の移動距離や生理的データ等の分析を行った。第2に、ブラインドサッカークラブチームの組織運営に関わっており、クラブチーム代表者・監督、視覚障害児のスポーツ活動に関与するスタッフらを対象に調査を実施した。これらの研究は、ブラインドサッカークラブや関係者への科学データのフィードバックを行い、競技の普及・強化、継続的な研究に向けた基礎的な資料を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、視覚障害者スポーツ場面から得られた言語教示内容の分析から、視覚障害者スポーツの指導体系の基盤的研究と競技力向上プログラムの作成への期待がある。それと同時に、健常者の指導でも原点でもある「伝える」というコーチングスキルを明確にすることができ、言語コミュニケーションの獲得へのアプローチを探る手がかりになるといえる。さらに、相互理解やイメージの共有など健常者における指導においても有効な知見になるといえ、独創的であり社会的に大きな意味をもつと考える。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted by a quantitative and qualitative approach as a basic study for constructing a coaching system from the viewpoint of language instructions related to the performance of blind football play. First, we analyzed the content of language teaching and teaching methods for coaches and guides, and analyzed the distance traveled during play and physiological data. Second, we conducted a survey of club team representatives / directors and staff involved in sports activities for visually impaired children, who are involved in the organizational management of blind soccer club teams. These studies provided feedback of scientific data to blind soccer clubs and related parties, and provided basic materials for the dissemination and strengthening of competitions and continuous research.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：パラスポーツ コーチング インタビュー 競技パートナー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

東京 2020 パラリンピック開催が決定したことによって、わが国の選手強化施策についても大きく変化し、選手の活躍がマスメディアの報道により身近になり、国内におけるパラリンピックへの関心が以前より高まってきている。医学的リハビリテーションの一環として開始された障害者スポーツ（パラスポーツ）は、パラリンピックなどの国際競技大会が行われるようになり、「競技スポーツ」として成熟してきた。特にアトランタ大会や長野大会を契機として、わが国のパラスポーツの状況は大きく変わり、プロとして活躍や競技志向の高い選手が輩出されるようになった。その上、東京 2020 パラリンピックの開催決定により、強化費や補助金も含め、さらに大きな変化が訪れている。しかしながら、強化費や補助金はいわゆる競技力の高い一部のパラアスリートが配分されている現状であり、国・地方における障害者スポーツ普及促進に関する有識者会議（2016）の報告では、様々な障害特性を鑑みた継続的な研究や医科学サポートの必要性が叫ばれている。

その中で、パラアスリートのサポートという「ひとまとめ」の方略は、アスリートの障害種別、受傷歴、スポーツ競技歴等、様々な文脈あり、健常者のサポートと同様に考えることが難しい点もある。高山（1997）は、ひとつの理論をすべての障害者に当てはめることを批判している。本研究で調査した視覚障害者スポーツの場合、視覚に障害があり視覚情報を得られないことから、イメージ想起が難しいため、言語的コミュニケーションの重要性を報告（内田，2017）しており、これらにこたえうる客観的な科学データは多くない。パラアスリートを対象とした研究では、事例に根ざした実践研究に取り組むことは非常に意義があるといえる。

このようにパラスポーツの普及や強化を検討する中で、アスリートはもちろんのこと、パラスポーツの場合は、パラアスリートを取り巻くコーチや競技に関係するスタッフ等の調査が重要となる。本研究の対象であるブラインドサッカー競技の場合には、ゲーム中の教示の起点となるコーチ、攻守の起点となるゴールキーパー・ガイドと選手における個々のコミュニケーションスキル（伝える・聴く・訊く）の違いや言語イメージの共有などを検証し、実際のプレーへの一致や教示後のプレーの変化について検討することが急務であった。

このように、パラアスリートに対するコーチングの質を向上させることが重要となる中で、「障がいかわからない」「接したことがない」といったパラアスリートへのコーチングやサポートにバリアがあることも問題視されている（荒木，2011）。申請者は、2006年からパラアスリートの心理サポートを実施する中で、コーチングに必要な効果的な言語的コミュニケーション向上させるためには、視覚障害者スポーツのコーチング経験が健常者へのスポーツコーチングに活かすことができ、互いのコーチングスキルを補完しながら向上できると実感している。

「意思伝達」という言語的スキル獲得のアプローチは、相互理解やイメージの共有など健常者の指導においても活用可能な知見であると思われる。また、本研究課題である視覚障害者スポーツ場面から得られた言語教示内容の分析から、視覚障害者スポーツにおける指導体系の基盤的研究と競技力向上プログラムの作成への期待がある。それと同時に、健常者の指導においても原点となる「伝える」というコーチングスキルを明確にすることができ、効果的な言語コミュニケーション獲得へのアプローチを探る手がかりになるといえる。さらに、相互理解やイメージの共有などが健常者における指導においても有効な知見になるといえ、独創的であり社会的に大きな意味をもつと考える。

2. 研究の目的

本研究は、視覚障害者スポーツ競技の中で唯一フィールドを自由に動くことができ、相手プレーヤーと接触があるブラインドサッカー競技関係者を対象に、プレー遂行に関わる言語教示からみたコーチングシステム構築に向けた基盤的研究である。第1に、ブラインドサッカー日本代表に関与するコーチ、ガイドに対するプレー中の言語教示内容に関する分析、視覚障害児のスポーツ参加を促すイベントに関与するスタッフへの言語教示内容に関する分析から、視覚障害者スポーツの指導体系構築に向けた基盤的検討をすることを目的とした。また、ブラインドサッカー選手を対象に、トレーニング及び試合における走行距離、移動スピード、心拍数など、ブラインドサッカー競技の基礎的なデータ測定を行い、言語教示との関連性について検討するための基礎資料を得ることを目的とした。なお、本研究は日本大学松戸歯学部研究倫理委員会の承認を受け実施した。

3. 研究の方法

ブラインドサッカー選手、コーチ、ゴールキーパー、ガイド、競技運営サポートスタッフ（選手の介助等）を対象に、下記の調査を実施した。

- (1) プレー中の言語教示内容に関する分析

日本を代表する選手とゴールキーパー、コーチ、ガイドに対する半構造化インタビューを実施し、言語指示内容や指導方法、さらには障害理解や他者理解など意思伝達方法について検討した。

(2) 視覚障害児のスポーツイベントに關与するスタッフへの言語指示内容に関する分析

視覚障害児のスポーツ参加を促すイベントに關与するスタッフへの言語指示内容に関する分析では、日本ブラインドサッカー協会に登録し、視覚障害児のスポーツ体験プログラム「ブラサカキッズトレーニング」に継続的に關わるボランティアスタッフを対象に、集合法による自由記述調査を実施した。

(3) ブラインドサッカー選手を対象とした活動量の分析

日本並びに大韓民国を代表するブラインドサッカー選手を対象に、「OptimEye S5 (Catapult 社製, Australia)」、「POLAR TEAM PRO (POLAR 社製, Finland)」を用いて、GPS を使用して選手の位置を追跡、移動スピードと移動距離、心拍数、加速度、最大スプリント数、ランニングケイデンスを測定し、分析を行った。活動量における測定は、日本並びに大韓民国で行われた。国内の測定は、男子は国内強豪クラブチームを対象として実施した。大韓民国では男子クラブチームに所属するブラインドサッカー男子韓国代表選手を対象として、大韓民国軍浦市で行われたトレーニング及び試合で測定を実施した。

4. 研究成果

(1) プレー中の言語指示内容に関する分析

ゲーム中に経験するプレー中の意識内容の開示を企て、日本を代表する選手を対象に空間知覚や情況把握に関する半構造化インタビューに着手した。基幹となる質問のうち代表的なものとして、①「相手や味方の情況について何を手がかりに把握しているか。」、②「あるプレーを実行する上で、何を手がかりにしているか。」の回答から得られた知見を示す。①においては、相手や味方の「音・声」を頼りに「位置」「距離」を把握し、ガイドやコーチからの短い掛け声に含まれる意味の授受をもって情況を把握しているという。こうした少ない伝達内容で情況把握に至る背景には、チーム内において取り決められた「約束事」があった。選手は事前の共通認識を持ち合わせた上で、ゲーム情況に即した音・声から意味内容を読み取り、それに応じた動きに意識が向けられていた。このような情況把握を基盤としながら、②に対して「これまでの経験から類似した局面を引き出す」ことで情況を先取りし、自らのプレーを実現させるという。ゲームにおいて多様に変化する情況下でも、自らの経験として蓄積されている局面を参照し、それに応じた動きかたの感覚を引き出す事が可能であるため、選手は「情況に応じて、次は何をするべきかわかる」のである。これらは、選手自らの感覚のみで動いているのではなく、コーチ、ガイド、仲間との共通理解によって達成されている。それゆえ、意思の疎通が図れていない場合は、ポジショニングが重なることや距離感を誤り衝突することもあるという。そうした失敗は、すぐにコーチや仲間と修正が図られ、その失敗経験までもが成功体験の蓄積に活用される。そうした微細な相互作用の積み重ねが、ゲームにおける情況把握や判断に貢献している。

次に、日本を代表するブラインドサッカーチームのガイドを対象とした半構造化インタビューに着手し、指導観の開示に着手した(表 1)。ジュニアサッカーの指導と並行してブラインドサッカーのガイドに携わる者の「指導理念」は、両種目の指導経験が相互に補完することで成立していた。なかでもブラインドサッカーにおいて、選手の能力や認識の傾向を把握することで、相手が了解可能な内容に変換して情報を伝達している。この実現には、「他者の視点」を積極的に受容する態度の重要性をサッカーの指導を通じて得ていることにある。情報や感覚も含めて他者との認識のズレが生じることが前提にあり、それを相互作用によって擦り合わせていくことが個々の特性理解に結びついていた。こうした個々への対応を日々検討することが、常に自らの指導や伝達内容・態度を「振り返る」機会ともなっている。これを晴眼者がゲームをする場合、こうした他者とのやり取りが無くとも視覚で多くの情報を得ているために十分にプレーが実現できるだろう。だが、ガイドとブラインドサッカー選手とのやり取りは、見えることによって潜在化している感覚や認識を顕在化させる重要な契機となっている。それはインタビュー中の「ブラインドサッカーに携わり、目が見えていない選手の方が見えていることが多い」との言葉に集約されている。

そして、ブラインドサッカークラブチームの組織運営に關わっており、中等教育課程に在籍する生徒に教育にも携わるブラ

表 1.ブラインドサッカーガイドのインタビューより生成されたカテゴリー及び概念

カテゴリー	サブカテゴリー	概念
指導理念	サッカーの指導理念	サッカーの指導観(13)
		視座の形成(4)
	ブラインドサッカーの指導理念	ブラインドサッカーの指導観(6)
		ガイド・コーチの資質向上(3)
類化	業界の発展(2)	
対自己の知識	類化	類化(7)
		指導の振り返り(6)
	省察	自己分析(5)
		役割の把握(4)
見方や考え方の更新	状況の振り返り(3)	
	認識の更新(11)	
対周囲の知識	能力把握	指導上の困難(3)
		選手の能力把握(27)
	他者理解	能力差の把握(8)
		プレイ理解(11)
状況理解	特性理解(2)	
	状況の想定(6)	
戦術の指示・伝達	状況理解	状況の蓄積(4)
		状況の共有(2)
	戦術の指示・伝達	傾向と対策(6)
		状況の伝達(5)
戦術の指示・伝達	プレイのフィードバック(4)	
	コード化(4)	
戦術の指示・伝達	情報の限定(4)	

インドサッカーチーム代表者・監督1名を対象に半構造化インタビューに着手し、視覚障害者選手の競技力向上に向けたトレーニング環境の在り方、要望や展望について調査を行った。その中で、「安心して通える、通い慣れた場所」、「選手やスタッフとの、情報交換が容易くできる場所」、「移動方法も含め、安心して集中できる場所」、「専門的知識だけではなく、選手やスタッフと連携の取れる信頼できるスタッフ」、「効果的であり、シンプルなプログラムで扱いやすい器具」への対応や準備が急務であることが示唆され、ブラインドサッカー競技におけるスポーツ強化環境の向上に向けた基礎的な資料を得ることができた。

(2) 視覚障害児のスポーツイベントに関与するスタッフへの言語指示内容に関する分析

ブラインドサッカー協会の主催する視覚障害児向けのスポーツイベントの運営やブラインドサッカー選手と児童生徒との交流を目的とした教育プログラムの運営等に関係するボランティアスタッフ31名を対象に調査を実施した。

当調査では、視覚障害児への介助のみならず、スポーツコーチングの機能の必要性が示唆されている現状を鑑み、ボランティア自身の認識および今後のボランティアの参画の在り方に向けた基礎的な資料を得ることを目的とした。ボランティアから得られた75の有効回答を分析した結果、ボランティア自身が捉えた、「トレーニングプログラムを通じてのボランティア自身の変化」として11カテゴリー(表2)、「トレーニングプログラムにおける参加児童の相互作用の変化」として12カテゴリー(表3)が作成された。その結果、サポートスタッフの活動経験がソーシャルスキル獲得に影響を及ぼすこと、障害に対する知識に加えて、コーチングに必要な専門的知識の必要性が示唆された。今後のボランティアには、眼前の現象の立出に至る意味や価値を捉える高次の認識と障害に対する専門的知識はもちろん、パフォーマンス発揮を促すコーチングに必要な専門的知識の必要性が示唆された。

表2. トレーニングプログラムを通じてのボランティア自身の変化

カテゴリー	回答の具体例
やりとりの増加(15)	初めはごちなかつたコミュニケーションがボディランゲージによってスムーズになった 視覚情報は伝えられないので、たくさん話すようにした
心的距離感の変化(5)	少しずつ打ち解けていくことができた 次第に打ち解けられた
安心感(3)	時間の経過とともに親近感が増してきた 安心して身体を動かしてくれた
意思表示(3)	積極的に意思表示するようになった 大きな変化はないが上手くできたり勝ったりすると素直に喜んでいく
信頼関係の構築(3)	信頼関係の強さが変わることが言葉から分かる 頼ってくれるようになったと思った
しぐさ(2)	言葉を発することはありませんでしたが、仕草が大きくなった気がした はじめから目を見て接してくれたが、最後まで同じように接してくれた
克服(2)	お母さんに叱られていましたが、負けず嫌いと思い通りにいかない不満、鬼ごっこ時の恐怖等改善していると思う 前向きに向きあう意志
限定的主張(1)	おとなにははっきり言えるのに、友だちには少し遠慮する
高次化(1)	「自分についてくれる人」から「自分と一緒に活動する人」に変わった
態度変容(1)	周りを気にするようになった
否定的主張(1)	自分になれてきたためか、否定的な主張や他の子どもに対して攻撃的な言葉や行動が増えていた
要求(1)	強度の弱体であるため、常にサポート(手をつなぐ)ことを求めている

表3. トレーニングプログラムにおける参加児童の相互作用の変化

カテゴリー	回答の具体例
コミュニケーション達成の喜び(9)	否定的な主張が増えてきたので、何とか励ますために褒めたり、元気づけたりする声かけが増えた 触れあい方に少し遠慮がちであったが、最後にはしっかりと仲良くすることができた
楽しさの共有(7)	距離感が縮まり、自分も一緒に楽しめるようになった 子どもの性格を垣間見ることができてとても楽しかった
活力(3)	自分もガンバろうと思わせる 明るく元気になった
気づき(3)	子どもは素直で、何か特別なように感じていた以前までの自分の考えを改めようと思った 不満の原因と対応可能かを分かるように伝える必要があると感じた
勉強・学び(3)	いろいろな方法でチャレンジを受けている子供の成長をサポートできる勉強をさせてもらっている 反対にこちらが勉強になることが多い
メタ的(3)	見えて当たり前が、見えないことを意識するきっかけになった 表情だけでは通じないコミュニケーション(声配り)の重要性を再認識した
共感的情意・変化(喜び)(3)	元気で笑顔で楽しんでくれるだけで幸せだった 素直についてきてくれたのはうれしかった
方法知(2)	いつも接し方に迷うことがあるが、健常者とかわらない対応ができるようになった 彼らが「出来ること」「出来ないこと」の見極めに注意をそそぐようになった
支援・ストラテジー(2)	子どもを自由にさせてサポートしてあげることが重要だと思った 自分も改めて周りを意識しながらやっていきたいと思った
愛情の芽生え(1)	愛情を感じた
成長を見たい(長期的展望)(1)	今後の成長を見守りたいと思った

(3) ブラインドサッカー選手を対象とした活動量の分析

1) ブラインドサッカー男子韓国代表選手を対象とした活動量の分析

本測定では、2017年10月21日に大韓民国軍浦市で行われた慶尚北道対仁川を分析対象の試合とした。対象の選手は、前半と後半の25分ずつの計50分間に出場した慶尚北道に所属する大韓民国ブラインドサッカー代表選手である3名であった。

試合中における3名の移動距離は、2894.5±650.11m(前半1342.3±290.9m、後半1552.2±366.6m)であった(表4)。1分間の移動距離に換算すると56.1m(前半52.4m、後半59.7m)であった。移動速度は前半3.0±3.0km/h、後半3.6±3.4km/hであり、前半の最高移動速度は11.0km/h、後半は12.2km/hであった。速度ゾーン1(0-3km/h)とゾーン2(3-6km/h)で移動した距離は2427.5mとなり、総移動距離の83.9%となった(図1)。心拍数は149+8.15bpm(前半133.9±19.53bpm、後半165.5±15.11bpm)であった。

ゲームパフォーマンスを構成する要因を測定した結果、低速度でのプレーが8割以上であった。このことから、競技特性やゲームの構成原理はフットサルと同型であるが、プレイヤーの動作特性は異なることが推察され、ブラインドサッカー特有の動作特性を有していることが示唆された。もちろん、パフォーマンスの向上は、個々の障害特性発病(受傷)時期や動作特性を理解しながら行われることになるが、短距離での移動速度の向上を目的としたトレーニングによってパフォーマンス改善に繋がると考えられる。

2) 国内強豪クラブチームを対象とした活動量の分析

本測定では、ブラインドサッカーの国内強豪クラブチームであり、2019年日本選手権（結果2位）全6試合中5試合を分析の対象試合とした。なお、当該クラブでは、日本代表候補選手4名を有しており、コーチはユース年代の日本代表コーチやブラインドサッカー協会の主催する視覚障害児向けのスポーツイベント等において中心的な役割を担っている。なお、測定データの正確性を担保するために、全試合時間出場した選手を分析対象とした。平均移動距離は922m（1分間当たり55m）であった。また、公式ゲームによる測定では1,140m（1分間当たり47m）であった。最高速度の平均18.0km/hであり、平均速度は3.0km/hであった。速度間のデータは、3.00-6.99km/hは39.4%、7.00-10.99km/hは29.2%、11.00-14.99km/hは13.4%、15.00-18.99km/hは1.75%、19.00km/hは0.17%であった。加速2.8m/s²・速度19km/hで計測されるスプリントは平均3.0回であった。個人最高11回であった。また、心拍数は最大平均204bpm・最小平均162bpmであった。

表 4. 1試合あたりの距離・速度・心拍

	Sub.A	Sub.B	Sub.C	Mean±SD (n=3)
Total Distance (m)	2143.9	3259.5	3280.0	2894.5±650.1
First Half	1010.3	1552.7	1463.8	1342.3±290.9
Second Half	1133.6	1706.8	1816.2	1552.2±366.6
Mean Speed (km·h⁻¹)	2.5±2.2	3.7±2.6	3.7±2.6	3.3±3.2
First Half	2.3±2.6	3.4±3.0	3.4±3.2	3.0±3.0
Second Half	2.7±2.9	4.1±3.4	4.0±3.7	3.6±3.4
Maximum Velocity	16.2	17.2	16.3	16.6±8.3
Mean Heart Rate (beats·min⁻¹)	148.0±34.5	142.7±18.9	158.7±17.4	150.1±27.0
First Half	115.9±7.8	134.1±18.1	153.3±20.9	134.4±22.5
Second Half	181.3±8.8	151.23±18.2	164.0±23.3	165.5±21.7

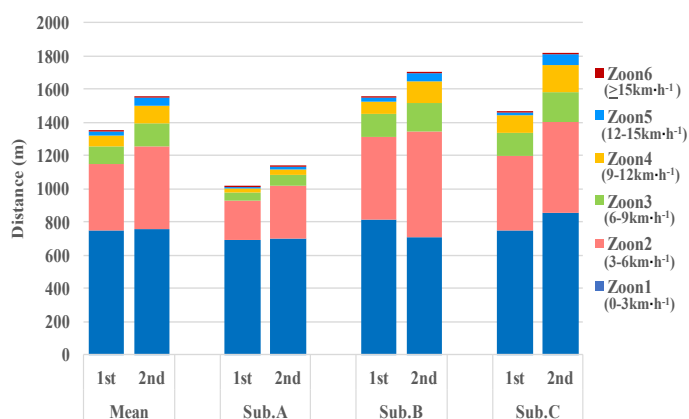


図 1. 1試合あたりの速度間の割合

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 永田直也, 橋口泰一 (公益財団法人日本障害者スポーツ協会科学委員会 日本パラリンピック委員会医・科学・情報サポート心理領域)	4. 巻 1
2. 論文標題 これまでの心理基礎調査のまとめ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 令和2年度 心理基礎調査報告	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋口泰一, 大嶽真人, 伊佐野龍司, 坂本宗司, 菅野慎太郎, 村上重雄, 内田若希	4. 巻 22/2
2. 論文標題 スポーツボランティアの位置付けに関する探索的研究: 視覚障害児のスポーツ体験プログラムを対象として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 橋口 泰一, 大嶽 真人, 伊佐野 龍司, 菅野 慎太郎, 内田 若希	4. 巻 33
2. 論文標題 ブラインドサッカーにおけるトレーニング環境モデル構築に向けた実証的研究: クラブチームを対象とした人的・物的環境の調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 バイオメディカル・ファジィ・システム学会論文集	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 科学委員会 (荒木雅信, 中澤公孝, 岩岡研典, 植木章三, 内田若希, 奥田邦晴, 川村 慶, 齊藤まゆみ, 桜井伸二, 高木久見子, 橋口泰一, 元永恵子)	4. 巻 1
2. 論文標題 暑熱対策に関する実証測定と練習時および試合時の水分摂取に関する調査, 自律神経バランス測定等の報告書 (担当: 自律神経バランス測定について)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 令和元年度JSC競技力向上事業・パラアスリート暑熱対策研究事業 暑熱対策に関する実証測定と練習時および試合時の水分摂取に関する調査, 自律神経バランス測定等の報告書	6. 最初と最後の頁 33-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋口泰一, 菅野慎太郎, 牛来千穂子, 鈴木典, 井川純一	4. 巻 46/6
2. 論文標題 歯科学生における初年次の形態・体力について～2003年度から2019年度の17年間の記録から～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日大口腔科学	6. 最初と最後の頁 187-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 城間 修平, 伊佐野 龍司	4. 巻 5
2. 論文標題 バスケットボールのファストブレイクにおける創発身体知の形成過程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上重雄, 大嶽真人, 橋口泰一, 伊佐野龍司, 菅野慎太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 ブラインドサッカー女子日本代表活動報告書2019-2020	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ブラインドサッカー女子日本代表活動報告書2019-2020	6. 最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋口泰一, 大嶽真人, 伊佐野龍司	4. 巻 69/ 6
2. 論文標題 視覚障害者とスポーツーブラインドサッカーにおけるスポーツ心理学研究からー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 430-434
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋口泰一, 大嶽真人, 伊佐野龍司, 坂本宗司	4. 巻 1
2. 論文標題 ブラインドサッカーにおけるゴールキーパーの言語指示に関する探索的分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身体と教育の実践知	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 城間修平, 伊佐野龍司	4. 巻 54
2. 論文標題 バスケットボールにおけるファストブレイク攻撃に関する実践知-トップレベルで活躍するガードプレイヤーの「語り」を手がかりに-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 桜門体育学研究	6. 最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊佐野龍司	4. 巻 67/ 8
2. 論文標題 保健の「技能」ってなあに？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 関慶太郎, 松原拓矢, 井川純一, 伊佐野龍司, 青山清英	4. 巻 1
2. 論文標題 投能力向上のための学習プログラムが女子中学生の投能力と動作に及ぼす影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身体の教育と実践知	6. 最初と最後の頁 79-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本道慎吾, 伊佐野龍司, 青山清英	4. 巻 1
2. 論文標題 ハードル走の学習における運動内観報告の内容に関する運動学的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身体と教育の実践知	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊佐野龍司, 大嶽真人, 城間修平	4. 巻 1
2. 論文標題 ボールゲーム指導に関する研究の課題と方法をめぐる議論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身体と教育の実践知	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊佐野龍司, 大嶽真人, 城間修平, 水島宏一, 野口智博, 吉田明子, 本道慎吾	4. 巻 32/1
2. 論文標題 ボールゲームにおける「ボールを持たないときの動き」に焦点化した創発身体知の発生分析方法に関する一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 コーチング学研究	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋口泰一, 大嶽真人, 伊佐野龍司	4. 巻 13
2. 論文標題 ブラインドサッカーの心理	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フットボールの科学	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊佐野龍司	4. 巻 28
2. 論文標題 保健の学習評価 いま、何が、どう変わろうとしているのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中学保健体育科ニュース	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田明, 大嶽真人, 橋口泰一	4. 巻 11
2. 論文標題 大学ラグビーチームの強化に適した組織変革論の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本ラグビー学会誌ラグビーフォーラム	6. 最初と最後の頁 49-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木理・伊佐野龍司・吉田明子・城間修平	4. 巻 6
2. 論文標題 実践的指導力を高める教員養成プログラムの探究 体育の教材研究を通じた学生の認識変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学FD研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊佐野龍司	4. 巻 2
2. 論文標題 保健学習の実践的指導力向上を企図した養成段階における授業実践 保健の模擬授業を通じた思考の深化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋弥生, 伊佐野龍司	4. 巻 1
2. 論文標題 学校における課題を抱える生徒への指導視点・方針と指導経緯の解釈に関する事例報告	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 伊佐野龍司
2. 発表標題 通常学級に在籍する特別な配慮を必要とする生徒に通じる体育教師の実践的知識-高等学校体育授業における一事例を対象にして-
3. 学会等名 桜門体育学会第11回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋口 泰一, 大嶽 真人, 伊佐野 龍司, 菅野 慎太郎, 内田 若希
2. 発表標題 ブラインドサッカーにおけるトレーニング環境モデル構築に向けた実証的研究: クラブチームを対象とした人的・物的環境の調査
3. 学会等名 第33回バイオメディカル・ファジィ・システム学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋口泰一
2. 発表標題 メンタルトレーニング指導の現場: 指導者や科学スタッフとの連携 (パラアスリートにおける心理サポート)
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅野慎太郎, 橋口泰一
2. 発表標題 歯科衛生専門学校授業における身体運動が受講生の気分状態に及ぼす影響：運動強度の違いに着目して
3. 学会等名 第38回日本歯科医学教育学会総会および学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊佐野龍司, 大嶽真人, 橋口泰一, 坂本宗司, 小林法爾実
2. 発表標題 ブラインドサッカー選手に対する全身振動刺激のトレーニングがステップ運動の成果に及ぼす影響
3. 学会等名 東京体育学会第10回学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小坏昭仁, 大嶽真人, 長谷川望, 八百則和, 福士徳文, 末永尚, 島寄佑, 吉村雅文
2. 発表標題 サッカー選手の技能に対する認識
3. 学会等名 日本フットボール学会 16th Congress
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大嶽 真人, 橋口 泰一, 伊佐野 龍司, 坂本 宗司, 吉田 明
2. 発表標題 ブラインドサッカーにおける競技力向上に向けた分析-クラブチームの攻撃と守備の傾向から-
3. 学会等名 日本フットボール学会 16th Congress
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋口 泰一, 大嶽 真人, 伊佐野 龍司, 坂本 宗司, 菅野 慎太郎
2. 発表標題 ブラインドサッカーにおけるガイドの意思伝達に関する定性的分析
3. 学会等名 日本フットボール学会 16th Congress
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masato Otake, Yasukazu Hashiguchi, Ryouji Isano, Shuji Sakamoto, Woo young Lee, Nobuo Kikuhara
2. 発表標題 Analysis of movement characteristics of Blind Football players by GPS
3. 学会等名 2018 KNSU International Conference -Asia-Pacific Conference on Coaching Science- (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅野慎太郎, 大嶽真人, 橋口泰一, 伊佐野龍司, 坂本宗司, 村上重雄
2. 発表標題 1泊2日のスポーツキャンプが視覚障がい児のソーシャルスキル獲得に及ぼす影響 学年・性別・参加経験・全盲弱視の各要因による検討
3. 学会等名 日本コーチング学会 第29回学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅野慎太郎, 大嶽真人, 橋口泰一, 伊佐野龍司, 坂本宗司, 村上重雄
2. 発表標題 1泊2日のスポーツキャンプが視覚障がい児のソーシャルスキル獲得に及ぼす影響 - プラサカキッズキャンプ関西2017を対象に -
3. 学会等名 桜門体育学会平成29年度(第8回)大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅野慎太郎, 橋口泰一, 鈴木典
2. 発表標題 歯科衛生専門学校授業におけるグループエクササイズフィットネスの心理的效果: 運動強度と心理状態の変化に着目して
3. 学会等名 第18回日本大学口腔科学会学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 阿部滉, 伊佐野龍司, 鈴木理
2. 発表標題 児童の主体性を導く教師の実践知
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Isano, Hashiguchi, Otake, Sakamoto
2. 発表標題 A study of the spatial perception of Japanese blind football players
3. 学会等名 VISTA 2017 Scientific Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hashiguchi, Otake, Isano, Sakamoto, Kanno
2. 発表標題 Practical knowledge of a blind football goalkeeper applied to verbal instructions
3. 学会等名 VISTA 2017 Scientific Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大熊誠二・鈴木直樹・伊佐野龍司・石塚諭・成家篤史・鈴木一成・野口由博・石井幸司・太田泰貴・阿部隆之
2. 発表標題 体育における「主体的・対話的で深い学び」を支援するICT利活用
3. 学会等名 日本体育科教育学会第22回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Naoki SUZUKI , Seiji Okuma , Ryoji ISANO , Tkayuki ABE
2. 発表標題 Standards for implementing the technology in PE
3. 学会等名 The 2017 International Conference for the 6th East Asian Alliance of Sport Pedagogy
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 日本大学文理学部体育学研究室編（大嶽真人担当：分担執筆，18：調整力を高めるには 34：アダプテッドスポーツとパラリンピック 41:職業としてのスポーツ）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 大学生のための最新健康・スポーツ科学	

1. 著者名 日本大学文理学部体育学研究室編（伊佐野龍司担当：分担執筆，14：運動不足がもたらすもの 37：アウトドア・スポーツ、アクティビティ 46：リーダーシップとフォロワーシップ）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 大学生のための最新健康・スポーツ科学	

1. 著者名 日本大学文理学部体育学研究室編（橋口泰一担当：分担執筆，コラム9）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 大学生のための最新健康・スポーツ科学	

1. 著者名 （公財）日本障がい者スポーツ協会（橋口泰一担当：分担執筆，第 編 障がい者スポーツ指導の基礎 第20章スポーツ心理学，pp136-143）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 株式会社ぎょうせい	5. 総ページ数 264
3. 書名 障がいのある人のスポーツ指導教本（初級・中級）2020年改訂カリキュラム対応	

1. 著者名 今村修，植田誠治，岡崎勝博，野津有司，野村良和，森良一編著（伊佐野龍司担当：分担執筆，第 部 第3章 第4節「保健科の評価論 学習評価」）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 338
3. 書名 保健科教育学の探究 研究の基礎と方法	

1. 著者名 渡邊正樹，伊佐野龍司，久田孝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 272
3. 書名 学校安全と危機管理 三訂版	

1. 著者名 荒木雅信 編著（橋口泰一担当：分担執筆，第 部4章パラリンピック選手への心理サポートの現状と課題，pp164-168）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 184
3. 書名 これから学ぶスポーツ心理学 改訂版	

1. 著者名 日本保健科教育学会編（伊佐野龍司担当：分担執筆，第三章 保健授業の展開例 第2節 中学校・高等学校 欲求と適応機制）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 194
3. 書名 保健科教育法入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	大嶽 真人 (OTAKE Masato) (90338236)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究 分担者	伊佐野 龍司 (ISANO Ryouji) (00734112)	日本大学・文理学部・准教授 (32665)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	松崎 英吾 (MATSUZAKI Eigo)	特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山本 夏幹 (YAMAMOTO Natsuki)	筑波大学附属視覚特別支援学校	
研究協力者	村上 重雄 (MURAKAMI Shigeo)	特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会	
研究協力者	菅野 慎太郎 (KANNO Shintaro) (70779884)	日本大学・松戸歯学部・兼任講師 (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関